

## 集団づくり

### (3) 集団づくりの手だて

集団づくりを進めるためには、子どもたちに、どのような力や技能を培う必要があるのでしょうか。[第三次とりまとめ]は各学校において、教育活動全体を通じ以下のような力や技能などを総合的にバランスよく培う必要性を述べています。

- ① 他の人の立場に立ってその人に必要なことやその人の考えや気持ちなどがわかるような想像力、共感的に理解する力
- ② 考えや気持ちを適切かつ豊かに表現し、また、的確に理解することができるような、伝え合い、わかり合うためのコミュニケーションの能力やそのための技能
- ③ 自分の要求を一方向的に主張するのではなく建設的な手法により他の人との人間関係を調整する能力及び自他の要求を共に満たせる解決方法を見いだしてそれを実現させる能力やそのための技能

(〔第三次とりまとめ〕より)

これらの力や技能を身に付けることから、子どもたちは自他ともに大切さが認められた安全で安心な集団を築いていくことができると考えられます。

加えて、子どもたちは、授業を中心とした学習活動ばかりでなく、「隠れたカリキュラム」からも多くのことを学びます。隠れたカリキュラムとは、「教育する側が意図する、しないに関わらず、学校生活を営む中で、児童生徒自らが学びとっていく全ての事柄を指すものであり、学校・学級の『隠れたカリキュラム』を構成するのは、それらの場の在り方であり、雰囲気といったものである。(〔第三次とりまとめ])」といわれるものです。

集団づくりを進める上で、また、子どもたちの自尊感情を育む上でも、隠れたカリキュラムは、重要な役割を果たすと考えられます。

学校において、最大の隠れたカリキュラムは教職員そのものだといえます。子どもたちに対する日々の眼差しやかかわり方は、子どもたちに大きな影響を及ぼします。例えば、「子どもの良いところを見つけようとする」「意識してすべての子どもたちに声をかける」「給食時の役割分担に偏りがないようにする」「清掃時にはともにからだを動かす」「心配事だけでなく、良いことも家庭連絡する」「表情、行動、態度などの気になる子どもには、すぐに声をかける」といったことは非常に大切ですし、教職員自身の有り様や人権感覚・人権意識も、子どもたちに少なからず影響するでしょう。「子どもは大人を映す鏡」といわれますが、教職員は常に自らを律し、平素から研鑽を重ねなければなりません。

また、教室や学校のあらゆる環境も大きな隠れたカリキュラムです。「掲示物や学級文庫の工夫」「学習する意欲が湧くような清潔で整頓された教室」「人権コーナーなどを設けて、常に人権関連の資料が子どもたちの目に触れるようにしておくこと」なども大切です。このような環境が整えられた「場」の雰囲気が子どもたちに伝わり、人権の尊重された学級づくりの基盤となります。

次に、どのようなことに留意して、日々の集団づくりを進めればいいのか、具体的に述べます。

## ① 学級開きを契機に

---

集団づくりにおいて、学級開きは大きなウエイトを占めます。この年度当初の取組によって、学級の一年間の道筋がある程度決まってくると考えられます。

学級開きは教職員が「どんな学級にしたいのか」「何を目指していくのか」など、「情」と「熱」をもって伝えることが重要です。そして子どもたちが、それぞれの願いを出し合い、どのような学級にしていくのかを話し合って学級の目標などを決めていくことも大切です。そうしたことが学級の方向性を明らかにするのです。

これまで、教職員自身が「なぜ『教師』になったのか」ということや、自分のこれまでの体験、様々な人権侵害との出会いなども含めて「語る」ことを大切にしている実践もなされてきました。教職員から子どもたちに対するアプローチは、様々あると考えられますが、学級開きは「人間味のある温かい学級」をつくっていくスタートにしたいものです。

## ② 授業の充実を

---

毎日の授業を「楽しくて、わかる」ものにするには、子どもたちにとって学校が楽しくなることに直結します。日々の授業を見直し、改善していくことが大切です。そのポイントとして、

- ・年間を見通した計画の見直しと充実
- ・授業形態などの工夫(グループ学習、机の配置等)
- ・授業のなかで子ども同士の意見交流をもつ
- ・教材・教具を工夫し、子どもたちの五感を刺激する
- ・学習規律の確立

などが挙げられます。また子どもたちの発言等の中にある「まちがい」を受けとめる教職員の姿勢や教室の雰囲気も大切です。それによって発言することに対する安心感が広がり、子どもたちがいきいきと活動する授業が展開できると思われれます。

## ③ 学校行事をてこに

---

学校行事は、子どもたちの違った面が見られる大事な「非日常」の活動です。運動会(体育大会)や文化祭(音楽発表会等)、修学旅行などを集団づくりの好機ととらえたいものです。こうした行事を、準備の段階からしっかり利用して、子どもたちをつなぐ貴重な機会として位置付けることが大切です。学級の班などを活用して仕事を分担し、行事を終えたときに達成感が味わえるような取組が望まれます。そのことによって集団づくりが一步前進すると思えます。

## ④ 日々起こる出来事を大切に

---

良い出来事も良くない出来事も、学級集団づくりの課題と結び付けて考え、その時々に応じた返し方をしていくことが重要です。

心温まる良い出来事があれば、それを学級全体に紹介し、みんなで共有することによって学級が「いい」雰囲気に包まれると考えられます。また良くないことが起こったときにも学級集団として考え、何が足りなかったのか、これからどうすればよいのかを話し合うことによって学級の人権意識が高まると思われます。いずれにしても教職員の「ていねいな対応」が必要になります。

もちろん普段から人権教育に基づいた積極的な生徒指導の実践も含めて、子どもたちの心を耕しておくことが必要です。

この他にも、「班活動」「委員会活動」「学習会（放課後等）」などは、それぞれの活動内容や活動人数は異なりますが、集団づくりの好機であることに違いありません。あらゆる手段を用いて個と個をつなぎ、学級や学年、また学校全体がよい雰囲気に含まれるようにする必要があります。

#### (4) 教職員の集団づくり

子どもたちの集団づくりを効果的に進めるためには教職員自身の集団づくりも欠かせません。[第三次とりまとめ]には「教職員が一体となって人権教育に取り組む体制を整え、人権教育の目標設定、指導計画の作成や教材の選定・開発などの取組を組織的・継続的に行うことが肝要である。」と述べられています。

常に子どもたちの様子を出し合って話し合い、お互いに連携を図りながら一人一人をていねいに見ていく営みは、非常に大切なものです。具体的にどのような取組に重点をおくのかを共通理解した上で、「人権尊重という視点に立った学級・学校をつくる」という目標のために、教職員集団が組織として機能し、人権教育の推進を目指すことが重要です。

教職員が一体となって人権教育を進めるという姿勢は、必ず子どもたちにも隠れたカリキュラムとなって広がり、人権教育推進の大きな役割を果たすものと考えます。